

医療費高騰の懸念から、予防医学への関心が高まっている。最近ではメタボリック症候群のキヤンペーンが大々的に繰り広げられ、皆が腹囲を気にするようになってきた。

漢方医学では古来、「未病を治す」という言葉があり、病になる前に予防

することが最高の医療であり、それができる医師が最上であると考えられてきた。前漢の書とされる『黄帝内経』には既に「未病」という言葉があり、予防医学を重んじてきたことがうかがわれる。

では、これを現代の医療に当てはめた時、漢方医学に何が出来るであろうか？。一つは漢方医学

そのものの考えを診断機能に生かすことである。

例えば「瘀血」という状態は今で言う「血液ドロドロ」状態であり、

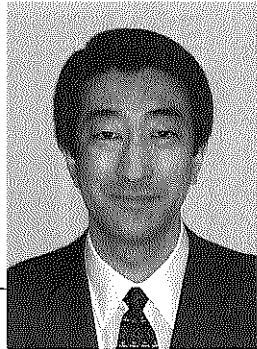
検査に出なくても舌やお腹の所見から「瘀血」があれば治療の対象となる。

人間ドックでも、検査値に異常がなければ健康

と診断されるが、漢方医学ではそれ以前に体に現れる

漢方シリーズ ⑪

慶應大学医学部助教授



渡辺 賢治

予防医学時代の漢方医学

力が増している状態である。「瘀血」状態は赤血球変形能が障害され、ずり応

力が増している状態である。これらの指標と共

に、漢方医学的診断を下

特に動脈硬化性疾患（虚血性心疾患、脳動脈硬化症など）が予防できるか

私が留学していた1990年代の米国では、ラ

酸化ストレスは脳変性疾患や脳内老化にも関連

見解である。

もう一つは、予防医療

としての漢方の活用である。既に、防風通聖散に

体重減少作用や大柴胡湯

による高脂血症の改善な

どのエビデンスがある。

また、糖尿病患者さんな

どには八味地黄丸、牛車

腎気丸などの投与によ

り、合併症予防が可能と

いう基礎研究は多く存在

する。

どうかを証明することは

なかなか難しい。長期に

わたる臨床研究を組み、

それを証明するのが理想

であるが、結果が出るの

は20年先、30年先であ

る。また個人差があるの

で、それを凌駕するだけ

の大規模研究が必要とな

る。

そこで、代理マーカー

が用いられるわけである

が、これに関しても、ど

の指標がいいのか定見が

ない。例えば「抗酸化作

用が動脈硬化予防に重要

である」ということが言

われてから久しい。

酸化ストレスは脳変性

疾患や脳内老化にも関連

しており、この領域にも

抗酸化能を有する漢方薬

の効果が期待がかかる。

現在、科学技術振興機構

の研究において名古屋大

学と共同で、漢方薬が生

体に及ぼす抗酸化能に関

する多面的評価手法の開

発に取り組んでおり、き

ちんと評価できる時代が

近づいていると期待して

いる。

「漢方医学は非科学で